

吉野行ききの電車

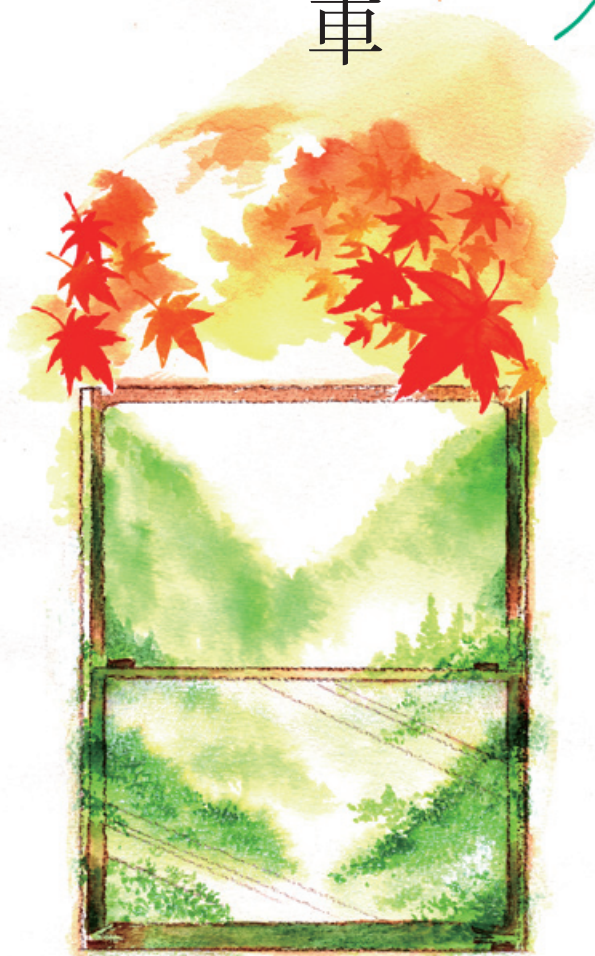
二十年前、私が通っていた大学は大阪府の南の端にあった。

奈良との県境に近い場所で、本当か嘘かわからないが、学校の裏山で迷子になった学生が、奈良県で発見されたという伝説まで囁かれていた。

そして、当時から今に至るまで、私が住んでいるのは大阪の中でも「北摂」と呼ばれる北のエリアである。静かなのに、便利で暮らしやすい土地で、今もここから離れるつもりはない。

だが、大学からは遠い。乗り継ぎがうまくいって二時間、うまくいかなければ二時間半近くかかる。往復で五時間。なんの拷問だ。

もう少し遠ければ、大学近くで一人暮らしをはじめられることもできるが、やはり



イラスト・岡林玲生

交通費を考慮しても、それ以上お金はかかるし、なにより田んぼしかない大学の近くに住むのは、あまり気が進まなかった。結局、思案の末、私は一日五時間近く電車を揺られて、大阪府を縦断する方を選んだのである。

幸い、一時限目の授業に出るにはラッシュ時より早めに家を出なければならぬ。たどえラッシュ時に差し掛かって、電車が混むのは我が家から中心部までのせいぜい三十分である。残りの時間はのんびり座って通うことができた。

天王寺までは地下鉄だが、それから先は近鉄電車に三十分ほど揺られる。吉市

という駅まで吉野行ききの急行に乗り、そこで乗り換えて喜志という駅で降り、そこからバスに乗った。

その、吉野行ききの急行が好きだった。私がこれから向かうのは学校という日常だけど、少し気まぐれをおこして乗り過ぎて、少し気まぐれをおこして乗り過ぎて、少し私を運んでいくのだと思うと、なんだか楽しい気分になった。特に四月の中頃、学校のまわりの桜がそろそろ終わりはじめたときには、このまま吉野まで乗っていききたいという誘惑に逆らうのは難しかった。

もちろん、吉野まで行ったことも数回

ある。結局、人の多さに躊躇して桜の季節に訪ねることはなかったけど、初夏や秋口に訪れる吉野も静かで美しかった。

住宅地を走っていた小豆色の列車は次第に深い山の中に分け入っていく。親しみのある緑は、吉野に近づくにつれ、どこか神秘的で凶暴ささえ感じさせる緑に変化していくのだ。始発駅の阿部野橋とは気温からして、まったく違う。特に夏は別世界のようなもので毎日のように、吉野のひんやりとした空気を思った。数年前から、私はときどきその母校に今度は教員として行くようになり、同じ小豆色の列車に乗っている。吉野行き、というアナウンスを聞いたたびに、乗り過ぎたい誘惑にかられるのも同じである。

文・近藤史恵
Fumie KONDOU

1969年、大阪府生まれ。大阪芸術大学文学部文芸学科卒。1993年、『凍える島』で第4回鮎川哲也賞を受賞。2006年より、大阪芸術大学文学部文芸学科客員准教授に就任。2008年、『サクリファイス』で第10回大藪春彦賞を受賞。作品に『青葉の頃は終わった』『タルト・タタンの夢』『モップの魔女は呪文を知っている』『ふたつめの月』『寒椿ゆれる』などがある。